

各論
(第2部12)

反日種族主義の淵源としての竹島問題

下條 正男 (拓殖大学教授)

韓国でベストセラーとなった『反日種族主義』が、日本でも昨年11月、文藝春秋社から日本語版が出版された。韓国では朴槿恵大統領を弾劾して以来、国内世論が二分し、対立が続いていた。その渦中に出版されたのが、李栄薫教授等の『反日種族主義』である。本書は、文在寅政権の暴走を危惧する人々に歓迎され、文政権に近い人々からは「不都合な虚構」と罵られている。その日本語版が刊行されると、忽ちベストセラーになった。

だが『反日種族主義』で取り上げた慰安婦問題、徴用工問題、竹島問題等は、すでに日本でも韓国側の「嘘」が明らかにされていた。それが本書で韓国側の「嘘」が論証されたとしても、喜んではいられない。解決できる歴史問題を、日本は解決することができなかったからだ。

日本は何故、韓国との歴史問題を解決できないのか。その日韓の齟齬は、1952年1月18日、日韓の国交正常化交渉に先立ち、李承晩大統領が公海上に設定した「李承晩ライン」から始まった。李栄薫教授が「反日種族主義の象徴」とする「竹島問題」は、その「李承晩ライン」に淵源がある。

1. 竹島問題の始まり

「竹島問題」は、李承晩大統領が公海上に「李承晩ライン」を宣言し、その中に竹島を含めたことから始まった。それも日韓の間では、国交正常化交渉の本会談が始まろうとしていた時である。

兪鎮午の後日談によると、李承晩大統領が「李承晩ライン」を引いたのは、「サンフランシスコ講和条約」が発効し、日本が国際社会に復帰する前に、日本を牽制する外交カードが必要だったからだとしている。そこで大統領は、朝鮮動乱で釜山に避難していた崔南善の元に兪鎮午を送り、竹島と対馬島について尋ねさせた。崔南善からは竹島については「確信のできる程度の説明」を受けたが、対馬島については首を左右に振ったという。^(注1)

李承晩大統領が対馬島に関心があったのは、大統領自身、1949年1月8日に対馬島を朝鮮領と発言していたからだ。この対馬島を朝鮮領とする歴史認識は、1419年の「応永の外寇」が基になっている。この時の対馬島侵攻は、朝鮮軍の敗績に終わったが、『世宗実録』には対馬島を新羅領とする記述があった。これが『東国輿地勝覧』(「東萊府条」)に「旧隸我鷄林」(旧我が新羅に属す)と記録され、対馬島を新羅領と認識するようになったのである。

これは竹島を朝鮮領とする歴史認識とも似ている。「朝鮮の于山島は日本の松島」と偽

証した安龍福が、『東国文献備考』（1770年刊）を増補した『増補文献備考』（1908年刊）で、再評価がなされていたからだ。その編纂に関わった張志淵は、『逸士遺事』（1922年刊）で、「龍福の功が二百余年の後、ここに至って始めて顕れた」とした。安龍福を英雄とする歴史認識は、張志淵と同時代の李承晩や崔南善によって共有されたのである。

その李承晩大統領が、1953年12月に「漁業資源保護法」を制定すると、韓国政府はそれに依拠して、これまでも増して日本漁船の拿捕抑留を強行した。これに日本政府が漁船員の解放を求めると、韓国政府は、朝鮮半島に残された日本人の個人資産に対する財産請求権の放棄を求め、日本に密航した半島出身者に法的地位を与えるよう強要したのである。韓国に拿捕抑留された日本人漁船員は、3929名にのぼった^(注2)。さらに韓国政府は、翌年（1954年）、竹島を武力占拠した。そこで日本政府は1954年9月25日、国際司法裁判所への提訴を韓国政府に提案したが、拒否された。その時、韓国政府は、「独島は日本の韓国侵略の最初の犠牲」で、「独島は単なる小さな島ではなく、韓国の主権の象徴」である。「日本が独島の奪取を狙うことは、韓国の再侵略を意味する」との歴史認識を示した。

この「歴史認識」は、盧武鉉大統領による2006年4月25日の「韓日関係に対する特別談話」でも繰り返された。『反日種族主義』では、竹島問題を「独島は今日、韓国人を支配する反日種族主義の一番熾烈な象徴です」とするが、それは竹島を武力占拠した時から始まっていた。だが「李承晩ライン」は、日韓の国交正常化とともに消滅し、竹島問題だけが残されたのである。

それも韓国では独島を「民族の自尊心」、「独立の象徴」とし、「独島死守」に傾くと、日本による「韓国侵略」から「韓国の再侵略」へと論理が飛躍し、日本に謝罪と反省を求めるのである。これは『反日種族主義』でも言及しているように、「日本を永遠の敵」とする論理が勢いを持つからである。

2. 歴史の中の日韓関係

1882年、ロシアの南下政策が続く中、清朝の黄遵憲が『朝鮮策略』を著し、清と朝鮮それに日本と米国が結び、対抗すべきだとした。これに対して、朝鮮の知識人等は「日本は我が国、百世の讎（仇）」として反対した。朝鮮の知識人には、国運よりも日本を「永遠の敵」とする思考が勝ったからだ。朝鮮半島の歴史を見ると、日韓の齟齬は、韓国側が日本を「百世の讎」とした時に訪れる。韓国の「歴史認識」は、日本を糾弾する手段だからである。

それには、3つの歴史的特性が関与している。第一点は、中国との関係から生まれた事大主義で、近年では、日本との間に「歴史問題」が起ると、韓国系米国人を使い、大国（米国）の世論を味方につけようと奔走したのがその例である。それに朝鮮半島には、中国との華夷秩序の中で育まれた小中華意識がある。日本を一段低く見て、日本に凌駕されることを極端に嫌うのである。そのため中国と日本に対する外交戦術も違っていた。朝鮮時代の丁範祖は、その対処法の違いを次のように述べている。

「清には事大主義で臨めばよく、夷狄の倭には誠信で相手を縛り、約束を結んで隙を与えてはならない」

李栄薫教授が、「古い昔から日本は仇敵でした」。「中国に対する敵対感情は歴史的に希

薄でした」とするのは、この伝統的な外交戦術のことである。そのため日本には「過去の清算」や謝罪を求めても、中国には求めないのである。そこで日本から少しでも被害を受けたと思えば、事実無根の日本批判でも平然と続けることができるのである。

そこに「反正」という、行動様式が結びつくのである。島根県議会による「竹島の日」条例の制定が確実にになると、盧武鉉大統領は「東北アジアの平和のための正しい歴史定立企画団」設置を指示した。これは「正しい歴史に反す」（「反正」）という、第二点目の特質である。それは敵対する相手は「悪」で、自分は「正しい」とする認識である。それが時代が変わり体制が逆転すると、敵対した相手には執拗に「謝罪」や「反省」を求めるのである。その原動力となっているのが、第三点となる「民意」の存在である。

日本と朝鮮半島は、同じ儒教文化圏に属すが、その社会体制は異なっていた。日本では鎌倉幕府の成立で地方分権的な「封建制」に移行したが、朝鮮半島では大韓帝国時代まで中央集権的な「郡県制」が続いた。そこで朝鮮半島では官僚制度が発達し、地方は中央から派遣された守令（地方官）が統治した。地方官には、警察権や徴税権が与えられたため、地方官による虐政は日常的だった。特に朝鮮時代末期の閔妃が、売官売職に積極的だったことから、農民等はしばしば民乱によって「民意」を示した。秕政は朝鮮全土で行われたので、「民乱」が発生すれば各地に拡散した。朴槿恵大統領を弾劾した「ロウソク集会」や日本糾弾のデモは一種の「民乱」で、「民意」の発露の一形態である。

だが治者と被治者が対立し、被治者が暴走すると、治者達は被治者に迎合してポピュリズムに走るのである。その伝統は、日本との間に「歴史問題」が起こり、官の一部が日本製品の不買運動を唱えると、「民意」が結びつくのである。朝鮮半島では、「反日」が明確な目標となっている時は官民が協調するが、平時に「協同」することは不得手である。これは地方分権的な「封建制」が続いた日本とは、異なる特質である。

近世の日本では、幕藩体制の下で、城下町を中心に経済共同体が生まれ、農村にも名主や庄屋を中心とした村落共同体が形成された。そのため江戸時代の後期には、二宮尊徳や大原幽学等の篤農家が出現し、村落単位の農村振興が行われた。その日本では藩を越えての民乱は起こり難く、起こっても「一揆」で、多くが藩内の騒擾で終わっている。

1906年、「施政の改善」を政策とした伊藤博文の統監府政治は、大韓帝国に「自治」を確立し、地域共同体の形成を目的としていた。その対象は、虐げられた朝鮮の小農達であった。1907年5月、大韓帝国の財政顧問部の目賀田種太郎は、「地方金融組合規則」を制定して、小作農を対象に信用貸与を前提とした小口金融を実施し、自作農創生を目指した。それは農業以外に産業がなかった大韓帝国で、疲弊した農民を救済し、地租による税収を確保するためであった。朝鮮の農民達は、その地方金融組合の活動を通じて意識を変えた。朝鮮時代の農民にとって、米は収奪の対象だった。それが商品として高く売れることを知ったのである。この意識変革は、農民達に経済的自立を促すことになった。その金融組合の根底にあったのが、江戸時代末期の、二宮尊徳や大原幽学の協同組合活動である。数字では知ることのできない、朝鮮農民の意識改革であった。

3. 竹島問題と「竹島の日」

李栄薫教授は、竹島問題を「反日種族主義の象徴」として、「独島は大韓民国成立後、そ

れもここ二〇年間に「浮かび上がった、という。これは1998年、竹島問題を棚上げして結んだ「日韓漁業協定」が発端となったという意味だろうか。

だがこれまでの竹島を巡る争いは、一時的に感情の対立があっても、いつの間にか忘れられてしまった。それが今に続いているのは、何故なのだろうか。

それは2005年3月16日、島根県議会が日本政府の妨害に抗して「竹島の日」条例を制定し、「竹島の領土権確立」を求めたからだ。それに盧武鉉大統領が反応し、その翌日には、「対日ドクトリン4大基調と五大原則」を発表した。これは3月7日、盧武鉉大統領が「独島問題を長期的・総合的・体系的に取り扱う専担機構の設置」を指示し、対日攻略を準備していたからである。それが4月20日の「東北アジアの平和のための正しい歴史定立企画団」の発足につながり、その一年後、政策提言機関としての「東北アジア歴史財団」に改組された。ここでも「正しい歴史」という観点に立脚して、「慰安婦」「徴用工」等の研究拠点となった。2012年には、「独島体験館」を設置して、竹島教育の場とした。

これに対して、日本政府が「領土主権対策企画調整室」を開設するのは2013年、「領土・主権展示館」を日比谷公園内の市政会館に開館したのは2018年である。竹島を侵奪された日本が、侵奪した韓国の後塵を拝しているのである。

一方の島根県は、2005年6月に「竹島問題に関する歴史についての客観的な研究」をするため、「島根県竹島問題研究会」を設置した。その研究成果を巡っては、韓国側との論争が続いている。島根県が「竹島の日」条例を制定したのは、1998年12月、竹島の領有権問題を棚上げして結んだ「日韓漁業協定」で日本海が乱獲の海となり、日本漁民が甚大な被害を受けることになったからだ。この島根県に対して、「竹島の日」条例の制定を阻止しようとしたのが日本の外務大臣と外務省高官である。

『反日種族主義』では、歴史問題に対する日韓の取り組みの違いには触れていない。その本書を日本の読者達が唯々諾々として受け入れれば、非は韓国側にあると錯覚してしまう。現に、日本語版が刊行されると、かつて韓国を「嘘つき」、「虚言」と評論していた人々は「我が意を得たり」と勢いついている。だがそれによって、日韓の問題が解決するものでもない。それよりも島根県にできることが、日本政府には何故できないのか。

『反日種族主義』ではその第2部12で、竹島問題を論じている。これに対して韓国では、李栄薫教授と東北アジア歴史財団のホン・ソンケン氏・朝鮮日報のリ・ソンミン記者との間で、論争が続いている。だがその論争は、互いに文献を恣意的に解釈した、水掛け論に終わっている。

4. 竹島問題について

李栄薫教授が最初に論じたのは、于山島についてである。韓国側ではこの于山島を現在の独島（竹島）と解釈し、文献の中に于山島があるとそれを根拠に、独島は韓国領だとしてきた。そこで李栄薫教授は、『三国史記』の「智証王十三年条」を問題にした。同条には于山国が新羅に編入された事実の記載はあるが、その于山国に于山島は含まれていない、としたのである。

だがこの場合、独島を于山島とする典拠から検証する必要があった。その典拠が1770年に編纂された『東国文献備考』の分注（「于山島は倭の所謂松島なり」）である。しかし

李栄薫教授とその論争相手は、『東国文献備考』の分注が改竄されていた事実には触れていない。于山島は、最初から独島ではなかったのである。それに『三国史記』では、于山国の疆域を「地方一百里」とし、『三国遺事』でも「周回二万六千七百三十歩」としている。その于山国に独島が含まれていないことは、自明である。

次が『世宗実録』「地理志」である。そこには于山島と鬱陵島について、「相去不遠。風日清明則可望見（互いの距離は遠くない。よく晴れた日には望み見ることが出来る）」と記述されている。李栄薫教授はその一文について、「于山とはもともと国の名前だったが、いつからかそれを島と考える誤解が生まれた。つまり、于山島は実在しない幻想の島である」としている。だがそれでは不十分である。『世宗実録』「地理志」が編纂された際には、「規式」という編纂方針が存在したからだ。鬱陵島のような島嶼の場合、管轄する地方官庁からの方角と距離を記載することになっていた。これは管轄する蔚珍県から鬱陵島が「見える」と読み、于山島に関しては、記述がなされていなかったのである。

それを李栄薫教授が「于山島は実在しない幻想の島である」としたのは、結論を急いだ結果である。これに対して、朝鮮日報のリ・ソンミン記者は、『世宗実録』「地理志」は世界記録遺産なので完璧」だとして、李栄薫教授を批判した。だがそれは一般論である。事実、『世宗実録』「地理志」の「蔚珍県条」だけでも二か所に誤りがあるからだ。それは智証王十三年とすべきところを十二年とし、『太宗実録』を『太祖実録』としているからだ。これは『世宗実録』「地理志」が未定稿の段階にあったことを示している。その誤謬は『東国輿地勝覧』に至って修正され、「見える」も蔚珍県から鬱陵島が「見える」となっている。

だが于山島の所在は、明確にできなかった。そこで『東国輿地勝覧』では「于山武陵本一島」とし、同時代の『高麗史』「地理志」では、一説として「于山武陵本二島」としたのである。これが『東国輿地勝覧』所収の「八道総図」に、実在するはずのない朝鮮半島と鬱陵島との間に于山島が描かれた理由である。その于山島を鬱陵島の別称としたのは、李孟休の『春官志』（1745年）である。于山島は、幻想の島ではなく、鬱陵島だったのである。

だが今日、韓国側が『世宗実録』「地理志」を根拠に、于山島を独島とし続けるのは、その所在が曖昧なことを利用し、恣意的な解釈ができるからだ。『竹島—もう一つの日韓関係史』を著した名古屋大学の池内敏氏が、下條批判に『世宗実録』「地理志」を使ったのも、後世の地誌では于山島が削除され、于山島を独島とすることができないからだ。

李栄薫教授は、その池内敏氏の主張を取り入れ、于山島を描いた地図には二種類があるとしている。だが池内氏は、肝心な事実には触れていなかった。それは1711年、朴錫昌の「鬱陵島図形」で竹嶼を「所謂于山島」として以来、于山島は鬱陵島の東約2kmの竹嶼となった事実である。

その後、朝鮮には、「八道総図」に由来する地図と、朴錫昌の『鬱陵島図形』系統に属す二種類の地図が流布していた。だがその于山島は、鬱陵島か竹嶼であった。

では『東国文献備考』の分注では、なぜ「于山は倭の所謂松島なり」とされたのか。これは1696年、鳥取藩に密航した安龍福が、鳥取藩主と交渉して、鬱陵島と于山島を朝鮮領にしたとし、「于山島は倭の松島だ」と供述したからである。だがそれは偽証であった。安龍福は、江戸幕府の命を受けた鳥取藩によって、追放されていたからだ。その安龍福が「于山島は倭の松島だ」と供述したのは、日本に密航する際に、『八道総図』系統の地図を持参していたからである。だが『八道総図』系統の于山島はもう一つの鬱陵島であった。

それに安龍福の証言によると、「倭の松島」は、鬱陵島よりも頗る大きな島だという。安龍福がその松島を于山島としたのは、鬱陵島で漁労活動中に鬱陵島の東北に島を目睹し、それが「于山島」と、朝鮮の漁師から教えられていたからだ^(注3)。その安龍福が、鳥取藩の大谷家の船頭等によって日本に連れ去られる途中、頗る大きな島を目撃したのである^(注4)。だが安龍福の于山島は鬱陵島の東北にあり、独島は東南に位置する小さな岩礁である。朴錫昌が『鬱陵島図形』に描いた「所謂于山島」は、朝鮮の漁師が安龍福に教えたのと同じ、竹嶼であった。

最後に、李栄薫教授は、「勅令第41号」で鬱島郡の行政区域とされた「鬱陵全島と竹島、石島」について、論じている。韓国ではこの石島を現在の独島として、独島は1900年に韓国領となったとしてきた。だが石島は、李奎遠の『鬱陵島外図』に描かれた島項である。紙数の関係で詳細は省くが、島項を韓国語として読むと「牛の項^{うなじ}」と読める。それは李奎遠が「形、臥牛のごとし」としたことからの命名で、島項はその韓国語音を漢字に借字したものである。勅令の表記は全て漢語である。そしてその島項を反切借字として漢語に直すと、「石島」となるのである。それに海図306号「竹邊灣至水源端」では島項を「鼠項島」(So moku Somu)と表記し、1909年の『韓国水産誌』でも鼠項島として、より反切借字に近い形で表記している。これは島項が石島であった証左である。

『反日種族主義』にも、その第2部で「独島、反日種族主義の最高象徴」として、竹島問題関連の論考がある。だがその完成度を高めるには、上記のような補足が要る。竹島問題は、日韓の歴史問題の原点である。この解決は喫緊の課題である。竹島問題から始まった韓国側の「歴史認識」を封印しない限り、次なる歴史問題を誘発するからだ。

しかし日本政府は、日韓の歴史問題の解決には及び腰であった。日本政府は何故、島根県に出来ることが出来ないのか。『反日種族主義』は、日本にとっても警鐘を鳴らす「善書」であった。

注

- 注1 『思想界』(1966年2・3月号)所収「韓日会談が開かれるまで」
- 注2 日韓漁業協議会編『日韓漁業対策運動史』(昭和43年)、436頁。「終戦後茲に二十年、韓国の国際法を無視した不法拿捕は、実に漁船三二八隻、抑留船員三九二九人、死傷者四四人にして、この損害額は総計九十億三千百万円に達する」
- 注3 竹島問題研究会『竹島問題に関する調査研究「最終報告書(資料編)」』2007年、所収『竹島紀事』42～43頁、「質人爰許逗留之内相尋候節申候ハ、今度参候嶋之名者不存候、今度参候嶋ヨリ北東ニ当リ大キ成嶋有之候、彼地逗留之内漸二度見江申候、彼嶋ヲ存タルモノ申候ハ、于山嶋與申候通申候」
- 注4 韓国史料叢書第十六『邊例集要下』卷十七、「鬱陵島」条、504頁、安龍福は「経一夜、翌日晚食後、見一島在海中、比竹島頗大云々」と供述。「竹島に比して頗る大」の竹島は、現在の鬱陵島のこと。